

# フランス国勢調査原簿の捏造問題-リヨンとマルセイユの事例から-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 駿台史学会 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國府, 久郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/15959">http://hdl.handle.net/10291/15959</a>

# フランス国勢調査原簿の捏造問題

— リヨンとマルセイユの事例から —

國府久郎

**要旨** 1946年の国勢調査と1966年の統計年鑑の刊行時に、国立統計経済研究所 INSEE の事後調査検証によって、リヨンでは1911年から1936年までの人口が、マルセイユでは1926年から1936年までの人口が大幅に水増しされたことが判明した。両市の人口捏造は10万単位で実行されていたので、国勢調査の原簿を綿密に調べると、偽の調査票を作り上げる際に「手間を省く」作業が行われていたのが明らかになる。リヨンでは5人核家族の割合が異常に高く、マルセイユでは主に14歳以下の子供と25歳から45歳までの既婚者から構成されるあらゆる世帯が捏造の対象になっていた。また、出生地の捏造を容易にするために、リヨンではリヨン出身者が、マルセイユではマルセイユ出身者が大規模に水増しされていた。両市の人口捏造問題は、フランス第二都市をめぐる争いが発端であると一般的には言われるが、議員の人数や様々な税率が総人口によって決められていたことや、人口増加の促進を求める両大戦間期における国家全体の風潮の影響なども、人口の水増しの原因として考えられる。

**キーワード**：国勢調査の原簿，リヨン，マルセイユ，人口捏造，フランス第二都市

## はじめに

19世紀初頭よりほぼ5年おきに実施された国勢調査の原簿 *listes nominatives de recensements* は、ある一定地域の住民構成や家族構成を分析するうえで不可欠な基礎史料である。だが、国勢調査の原簿を史料として利用する際には、考慮しなければならない問題点もあることが従来の研究で指摘されてきている。まず、毎年ではなく5年おきである調査間隔、何度か行われた調査事項の変更や追加、調査期間中に不在であった者に関する調査漏れなど、他国の調査でもみられるような一般的な国勢調査の問題点が挙げられる<sup>(1)</sup>。そして、フランスの国勢調査に関しては、未だに解決されていない人口統計上の重大な問題点として、リヨンとマルセイユの大幅な人口の水増し問題を指摘しておかなければならないだろう。

リヨンでは1911年から1936年までの人口が、マルセイユでは1926年から1936年までの人口が水増しされたことが、1946年の国勢調査と1966年の統計年鑑の刊行時に、国立統計経済

研究所 INSEE の事後調査検証によって明らかにされた<sup>(2)</sup>。INSEE の修正は 1946 年の調査結果を基準に行われ、捏造が疑われる期間の両市の人口は停滞傾向にあったと結論付けたが、この修正や人口捏造方法に関しては研究者により様々な異論も出されている。

本稿では、合計で数 100 万人に及ぶ、捏造された期間の両市の人口を確定することは目的としていないが、リヨンの人口の捏造問題について、地理学者のジャン・ビヤンフェが国勢調査原簿の人口捏造方法を見事に暴き出しているのので、第 1 章でこの捏造方法をまず紹介する<sup>(3)</sup>。第 2 章では、ビヤンフェが発見したリヨンの国勢調査原簿の捏造方法が、マルセイユの国勢調査原簿にも用いられていたのかを検証し、捏造された箇所の特徴を出来るだけ多く明らかにしていきたい。そして、人口統計の正確性を損なっている、捏造された期間の両市の国勢調査原簿を史料として利用する際に、いかに史料批判を行っていくべきかを考察することが本稿の主な目的である。最後に、この人口の捏造問題は、マルセイユとリヨン間のフランス第二都市をめぐる争いが発端であるとい一般的には言われるが、果たしてこの説が妥当なものであるのかについても若干の検討を加えてみたい。

## 第 1 章 リヨンの国勢調査原簿の捏造方法

### (1) 国勢調査の原簿

リヨンの国勢調査原簿の捏造方法を、地理学者ジャン・ビヤンフェの研究を参考にして考察する前に、国勢調査の原簿の特徴について簡単に説明をしておきたい。国勢調査の原簿は、主にフランス一般統計局 Bureau de la Statistique générale de la France (S.G.F.) が刊行した全国や各県の人口統計（国勢調査）の基になった手稿の住民名簿である<sup>(4)</sup>。原簿には調査の対象となった街区や通りの名前などの住所、被調査者の氏名、年齢か出生年、出生地、国籍、世帯主か世帯員の世帯主に対する続柄、職業、補足情報として雇主の氏名か職場が記載された<sup>(5)</sup>。

1856 年までは、国勢調査の原簿が原本であった。だが、それ以降は世帯調査票 bulletin de ménage がまず調査に導入され、1876 年には個人調査票 bulletin individuel が義務化された結果、国勢調査の原簿はこれらの調査票から作成されることになった。これらの調査票は、原簿を作成後にほとんど常に破棄されてしまったために、史料館にはごくまれにしか保存されていない<sup>(6)</sup>。それゆえ、人口の捏造は調査票を用いて行われたのか、国勢調査の原簿上で行われたのかははっきりしていない。それでも、おそらく人口の捏造は市町村長の指揮下で、偽の個人調査票や世帯調査票が作り上げられて主に行われていたのであろうと推察されている<sup>(7)</sup>。

### (2) リヨンの人口推移

さて、こうして捏造されたリヨンの人口がどのように推移していたのかについて、マルセイ

図表 1 フランス主要都市の人口推移

	1866	1891	1896	1901	1906	1911
パ           リ	1,825,274	2,447,957	2,536,834	2,714,068	2,763,393	2,888,110
マルセイユ*	300,131	403,749	442,239	491,161	517,498	550,619
リ           ヨ           ン*	323,954	438,077	466,028	459,099	472,114	523,796 (460,000)
トゥールーズ	126,936	155,791	149,963	149,841	149,438	149,576
サンテチェヌヌ	96,620	133,443	136,030	146,559	146,788	148,656
フランス総人口**	38,067,000	39,946,000	40,158,000	40,681,000	41,067,000	41,415,000
	1921	1926	1931	1936	1946	1999
パ           リ	2,906,472	2,871,429	2,891,020	2,829,746	2,725,374	2,125,246
マルセイユ*	586,341	652,196 (600,000)	800,881 (610,000)	914,232 (620,000)	636,264	798,430
リ           ヨ           ン*	561,592 (460,000)	570,840 (460,000)	579,763 (460,000)	570,622 (460,000)	460,748	445,452
トゥールーズ	175,434	180,771	194,564	213,220	264,411	390,350
サンテチェヌヌ	167,967	193,737	191,088	190,236	177,966	180,210
フランス総人口**	39,108,000	40,581,000	41,524,000	41,502,000	40,503,000	58,518,395

注：\*マルセイユの1926-1936年、リヨンの1911-1936年の括弧内はINSEEによる修正値。I. N. S. E. E., *Annuaire statistique de la France 1986 Résumé rétrospectif*, 72<sup>e</sup> volume, nouvelle série, n° 14, Paris, 1966, p. 41.

\*\*現在の国境の範囲。1999年以外のフランス総人口の数値はINSEEによる概算、1911-1936年の数値は、INSEEにより修正されたリヨンとマルセイユの人口数から算出した総人口。Ibid., *op. cit.*, p. 22.

出典：1866年、1921-1931年：Statistique générale de la France, *Annuaire statistique de la France, 1934*, Paris, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968, pp. 4-5; 1891年：Idem., *Annuaire statistique de la France 1895-1896*, Paris, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968, p. 3; 1896年、1901年：Idem., *Annuaire statistique de la France, 1901*, Paris, reproduit, Nendeln, Liechtenstein, 1968, pp. 4-5; 1906年、1911年：Idem., *Annuaire statistique de la France, 1914 et 1915*, Paris, reproduit, Nendeln Liechtenstein, 1968, pp. 6-7; 1936年：Idem., *Annuaire statistique de la France, 1937*, Paris, reproduit, Bad Feilnbach, Germany 1993, p. 5; 1946年：I. N. S. E. E., *Dénombrement de la population 1946*, Paris, 1947, p. 897; 1999年（二重調査を除く数値）：Idem., *Annuaire statistique de la France, édition 2006*, 109<sup>e</sup> volume, nouvelle série, n° 51, Paris, 2006, pp. 23-24.

ユなどの他の主要都市と比較しながら図表1で確認してみたい。パリ、マルセイユ、リヨンは、フランスの都市のなかで人口数、第一位から第三位を占めている。そして、以下に述べるようなフランス第二都市の地位をめぐるマルセイユとリヨンの人口の争いが、人口の捏造問題に深くかかわっていると、人口史の研究では一般に考えられている<sup>(8)</sup>。

1851年においては、マルセイユの人口が約195,000人で、リヨンの人口、約177,000人を上回っていた。ところが、リヨンは翌年の1852年に、周辺の三つの市町村（コミューン）を併合し、人口は約258,000人にまで大幅に増加した。リヨンはマルセイユに対して、1896年まではある程度の優位を保っていたものの、その後1901年までに人口が約7,000人も減少し、ついにマルセイユに第二都市の地位を譲ることになった<sup>(9)</sup>。

ビヤンフェによると、リヨンでは1896年と1906年の調査からすでにいくらか捏造が試みられ、1911年からINSEEに後に修正されるほど組織的に大幅な人口の水増しが行われた<sup>(10)</sup>。し

かし、その努力も空しく、1901年以降はマルセイユとリヨンの人口差は広がる一方であった。リオンは複数の市町村から構成される都市圏としてその後は成長を遂げたが、市の人口としては、リヨンの5倍も広大な面積のあるマルセイユに対して、あたかも不平等な争いを諦めていたかのようであった<sup>(11)</sup>。

リオンとマルセイユにおけるような国勢調査時の「悪習」は、財政的、あるいは政治的な目的から他のいくつかの都市でも実行されていた。とりわけ有名なのは、コルシカ島で1921年から1936年まで人口の水増しが国勢調査の原簿上で大幅に行われ、さらに選挙人名簿も捏造の対象となっていた<sup>(12)</sup>。

対照的にトゥールーズとサンテチエンヌでは、主に1896年から1911年の間に人口が15万人を越さないように、人口の調整が行われていた(図表1)。1893年7月25日の法により人口が15万人以下の市町村に関しては、公立学校の総支出における国家からの分担金に優遇措置が講じられていたために、中心街から離れた、あまり知られていない街区のいくつかの通りが主に意図的に忘れられ、そこに住む住民のすべてが調査から漏れてしまっていたのである<sup>(13)</sup>。

リオンとマルセイユにおける人口捏造の問題に話を戻すと、両市の人口捏造は10万単位で実行されていたために、偽の個人調査票や世帯調査票を作り上げるのは極めて困難な作業であったと考えられる。すべての調査票の情報を異なって作り出すのは到底できなかったようで、「手間を省く」作業が行われていたことが、国勢調査の原簿を綿密に調べると明らかになる。次節では、ビヤンフェの研究から、まずリオンでどのように人口が捏造されていたのかを紹介する。

### (3) リオンの人口捏造方法

ビヤンフェは、ローヌ県史料館に保存されている1911年、1921年、1926年、1931年、1936年の国勢調査の原簿を調査した。ここではビヤンフェの論考の主要部分である、中心街の第二調査区やその調査区に位置するカルティエ・コルドリエ quartier des Cordeliers に関する、1936年の原簿の分析結果から判明した人口捏造方法を中心に、要点のみをまとめてみたい<sup>(14)</sup>。

第一にビヤンフェは、リオンの人口捏造方法はオリジナルであるが、とても単純だと明言している。面積の狭いリオンでは、架空の通りや建物をでっち上げることはなく、実在する建物のなかで住居を水増しした。こうした住居には、決まった構成の家族が住んでおり、それは1936年と1931年の原簿では父親、母親、未成年の3人の子供からなる5人の核家族 familles nucléaires であり、1926年、1921年、とくに1911年の原簿では、5人核家族に加えて4人や6人核家族の場合もあった。これらの「幻の家族 familles fantômes」は、次の国勢調査時には原簿上から消え失せてしまい、世帯主の氏名を選挙人名簿に見つけることもできなかった。

1936年のカルティエ・コルドリエには、一般世帯に関して、1人世帯が1,368戸、2人世帯1,515戸、3人世帯1,031戸、4人世帯558戸、5人世帯1,728戸、6人以上世帯247戸が原簿に

フランス国勢調査原簿の捏造問題

記載されていた。5人世帯が1,728戸という数に上るのは驚きであり、こうした5人世帯の大半は両親と子供だけから構成される核家族であった。この5人世帯の異常な多さは、標本として抽出したコルドリエだけではなく、他のすべての調査区、大部分の通りで目立つ現象であったのである。

国勢調査の原簿には、被調査者の氏名、出生年、出生地、国籍、職業などの情報が記載されたが、5人核家族に含まれる被調査者の情報には一定のパターンがみられた。まず氏名と国籍に関しては、捏造が疑われる5人核家族はすべてフランス国籍と申告されており、氏名はフランス人名が用いられていた。

具体的に出生地を検証してみると、網羅的に分析した1936年の第二調査区の5人核家族、約1,500世帯のうち、例外なく子供はリヨン生まれであることが判明した。さらに、彼らの母親の95%、父親の80%もリヨン生まれであり、実際に当時の原簿（第二調査区のカルティエ・ベルクール quartier Bellecour の住居）を参照すれば、いかに捏造の手間を省く作業が実行されていたのかが一目瞭然である（図表2）。

図表2 1936年の国勢調査原簿（リヨン、カルティエ・ベルクール）

DESIGNATION	NOMBRES			NOMS	PATRIQUE	ANNEE	LIEU	SITUATION	PROBABILITE
	1936	1935	1934						
				Léonore		1898	Lyon	chef	
				Léonore		1901	"	épouse	
				Louis		1928	"	enfant	
				Louis		1930	"	enfant	
				Louis		1932	"	enfant	
				Louis		1936	"	enfant	
				Jean		1898	"	chef	particulier
				Léonore		1901	"	épouse	
				Léonore		1928	"	enfant	
				Étienne		1898	"	chef	particulier
				Louis		1901	"	épouse	
				Emile		1928	"	enfant	
				Jeanne		1930	"	enfant	
				Louis		1932	"	enfant	
				Louis		1936	"	enfant	
				Jean		1898	"	chef	particulier
				Léonore		1901	"	épouse	
				Léonore		1928	"	enfant	
				Léonore		1930	"	enfant	
				Léonore		1932	"	enfant	
				Léonore		1936	"	enfant	
				Jean		1898	"	chef	particulier
				Marcelle		1901	"	épouse	
				Léonore		1928	"	enfant	

名字は意図的に隠してある。架空の5人家族が連続して記載されている。その他の異常な点としては、出生年が世帯主1898年、妻1901年、3人の子供1928年、1930年、1932年というパターンになっているのに気付くだろう。J. Bienfait, "Deuxième article", p. 108.  
 出典：J. Bienfait, "Deuxième article", p. 108.

こうした手間を省く作業は、年齢や出生年に関しても実施されていた。5人核家族の世帯主は必ず男性で、働き盛りの30歳から40歳までの男性がほとんどであった。彼らの妻は、夫よりも常に若く、2,3歳差が最も多くて、3人の子供はとても規則的な間隔で生まれていた。時間の制約上、割合は算出していないが、全体的には、分析した標本では息子、つまり男の子供の割合が優勢なのは明らかである。子供の年齢は義務教育が課せられる14歳未満か、せいぜい16歳までであり、ここでも職業を見つける手間が省かれていたのである。

1936年の国勢調査の原簿では、彼らの母親はすべて無職と申告されている。父親には仕事を割り当てなくてはならなかったが、職業を捏造する際の想像力の乏しさを、原簿上から窺い知ることができる。父親の職業の大部分には、広い意味合いで用いられ捏造に便利な用語であろう「職員 employé」<sup>(15)</sup> が記載されていた。その他に、非熟練労働者、肉屋などの小商人、手工業者、歯医者などの自由業者も捏造の対象となっていたが、不況に陥っていた1936年において、1人も失業者を見つけられなかったのは驚くべきことである。

また、同じ建物内や通りには、同じ職業や雇主の氏名が繰り返し原簿上に記載されていた。換言すれば、社会的・職業的な集住が捏造によって発生してしまっていたのである。補足情報として職場が記載される場合でも、職場は住居のすぐ近くにあり、同じ建物内に同じ職場の人間が何人も集中する傾向にあった。

ビヤンフェは、1931年と1936年の原簿については、20分の1の抽出率でリヨン全体の調査も行っていたが、人口の水増しの割合は、第二調査区などの中心街が最も高く、郊外の調査区がより割合が低くなっていることも明らかにした。そして結論として、捏造された期間の人口の推定値を、1911年45~46.5万人、1921年45~46.8万人、1926年44.5~47.3万人、1931年44.3~45.9万人、1936年44.6~45.8万人と極めて慎重に幅を持たせて提示している。

このようにビヤンフェは、捏造された期間の国勢調査原簿をかなり大規模に分析しているが、それでも決定的な推定値を提示するには至っていない。マルセイユに関しても研究者により推定値の見解が分かれているので、次章で3人の研究者の推定値をまず検討してみたい。次に、本節で確認したリヨンの人口捏造方法が、マルセイユの国勢調査原簿にも用いられていたのかを検証し、捏造された箇所の特徴を出来るだけ多く明らかにしていきたい。

## 第2章 マルセイユの国勢調査原簿の捏造方法

### (1) マルセイユの人口推移

図表1ですでに示したように、当時の公式の発表ではマルセイユ人口は1926年に652,196人、1931年800,881人、1936年914,232人とその後は100万人に届くかの勢いで急激に増加した。大幅な人口の水増しが疑われるこの期間に関しては、1946年の国勢調査と1966年の統計年鑑の刊行時に、INSEEにより人口の修正が実行された。INSEEの修正は1946年の調査結

果を基準に行われ、捏造が疑われる期間の人口は停滞傾向にあったと結論付けた。ところが、この修正に関しては研究者により異論も出されている。そこで第一に、マルセイユの歴史家マリ＝フランソワーズ・アタールの見解を考察してみよう<sup>(16)</sup>。

アタールは捏造が疑われる期間については、INSEEの定めた期間に同意している。ただし、マルセイユ人口は1921年の586,341人から、あくまでも推定値としつつも、1931年には70万人弱まで増加し、1939年の戦争勃発まで人口が停滞していたとの見方を示している。その理由は、1920年代にはアルメニアやギリシア、その他の国からの亡命者がマルセイユに大半が家族で移住しに来ており、少なくとも15万人を超えていた外国人の増加は、1931年までの人口推移に大きな影響を与えていたと考えられるからである。

また、アタールは捕虜や不法滞在者の問題などを留意しなければならないとしながらも、戦争の影響で人口が減少した1941年において、食料配給証の発行枚数が65万枚を少し超えていたことも、70万人弱の推定値の根拠としている。

これに対して、地理学者マルセル・ロンカヨロはINSEEによる1931年の修正値である約61万人を採用している。しかしながら、INSEEによる水増しの修正期間(1926-1936年)は極めて慎重に定められているとし、リヨンと同様にマルセイユにおいても、1896年の調査からいくらか捏造が試みられ、1906年が組織的な人口の水増しの起点であろうと大胆な説を展開している<sup>(17)</sup>。

食肉の年間消費の動向から、人口の動向を分析したロンカヨロは、1896年の人口を423,000人、1906年465,000人、1921年530,000人と、当時の公式の数値よりも人口を少なめに見積もり、1931年までに人口は増加傾向にあったとしている。とはいえ、これらの数値はあくまでも仮説として提示されており、1930年代の人口はおよそ60万から65万人の間であろうとの見解を後に表明している<sup>(18)</sup>。

一方、シャルル・テュフリは、史料として国勢調査を直接用いて、人口の捏造問題に取り組んだ<sup>(19)</sup>。残念ながら、1951年に発行された5ページばかりの手短なこの論考において、分析方法の詳細については触れられていないが、1821年から1946年までの出生と死亡の動向や、年齢分布の分析から以下のような推定値を算出している。捏造が疑われる国勢調査は、INSEEと同じく1926年、1931年、1936年の調査としており、人口は各年およそ592,000人、613,000人、648,000人と徐々に増加したと推測している。

このようにマルセイユ人口の水増し問題に関しては、捏造の期間や水増しの割合についての見解に、3人の研究者で相違がみられる状況にある。それでも、3人の研究者の見解をあえてまとめるならば、両大戦間期が専門のオリヴィエ・ランベールも指摘しているように<sup>(20)</sup>、この期間にマルセイユの人口が70万人を超したことはないであろう。

## (2) マルセイユの人口捏造方法

本節では、先に確認したリヨンの人口捏造方法が、マルセイユの国勢調査原簿にも用いられていたのかを考察し、捏造された箇所の特徴を出来るだけ多く明らかにしたい。そして、なぜ捏造された期間のマルセイユ人口を確定するのが困難であるのかを、改めて説明することになるだろう。

リヨンでは捏造の対象となった「幻の家族」のほとんどが、30歳から40歳までの男性の世帯主と少しだけ若い妻、そして16歳以下の3人の子供から構成される「5人核家族」であった。そこで、マルセイユにおいても、5人核家族が大幅に捏造されていたのかについてまず検証してみたい。

本稿では、マルセイユ市史料館 (Archives municipales de Marseille, 以下 A. M. と略記) とブーシュ=デュ=ローヌ県史料館 (Archives départementales des Bouches-du-Rhône, 以下 A. D.) の両方に所蔵されている1931年の国勢調査原簿の分析を中心に考察を進める。標本として、マルセイユ東部郊外の最も端に位置する街区、カルティエ・カモワン quartier des Camoins を抽出し、マルセイユ全体に関しては、1926年と1931年の国勢調査後に市の都市計画課がまとめた調査報告を使用する<sup>(21)</sup>。リヨンでは郊外の街区よりも、中心街の街区でより人口の水増しの割合が高かったが、広大な面積を有しているマルセイユでは捏造が郊外でより実行されていたのではないかと推察されるために、本稿では郊外の街区を標本として選択した<sup>(22)</sup>。

マルセイユでは5人核家族は、カルティエ・カモワンに関しても、マルセイユ全体に関しても、リヨンほど明白に、異常な割合の高さで1931年の国勢調査原簿に含まれていなかった。1931年のカルティエ・カモワンには、一般世帯において、1人世帯が29戸、2人世帯84戸、3人世帯96戸、4人世帯99戸、5人世帯66戸、6人以上世帯50戸が原簿に記載されていた。マルセイユ全体についても、同じく一般世帯に関して、1人世帯が17,798戸、2人世帯45,634戸、3人世帯47,653戸、4人世帯35,006戸、5人世帯18,539戸、6人以上世帯17,080戸と、5人世帯が1931年と1936年のリヨンのように突出した割合を占めていたわけではなかったのである。

それでも、カルティエ・カモワンの原簿では、多くのマルセイユ出身者が連続して登録され、職場や雇主の氏名が補足情報として記載されていないページにおいては、4人か5人世帯の核家族が目立っている。例えば、図表3のページでは5人核家族と4人核家族が交互に登場し、すべての被調査者がマルセイユ生まれである。しかも、このページの前の約3ページについても、1戸の3人核家族を除いて、すべての被調査者が4人か5人核家族の構成員であった。

こうした4人か5人核家族が水増しされた結果、カモワンでは1911年に全一般世帯の27%の割合であった4人・5人世帯が、1931年には38%を占めるまでに至っている。しかしなが

図表4 1931年の国勢調査原簿（マルセイユ、カルティエ・カモワン）

DESIGNATION des QUARTIERS, villages ou hameaux	NUMÉROS du QUARTIER, VILLAGE, hameau ou feu			NOMS DE FAMILLE	PRÉNOMS	ANNÉE de NAISSANCE	LIEU de NAISSANCE	NATIONALITÉ	SITUATION par RAPPORT au chef de ménage	PROFESSION	Pour les militaires, chefs d'entreprise, avocats & médecins, instituteurs & pasteurs, etc. Pour les employés et ouvriers, indiquer le nom de patron ou de l'entreprise qui les emploie.
	des maisons	des ménages	des individus								
Duc St. Roch	5			Lafite	Pierre	1908	St. Roch	français	époux		
	1			Pascale	Louis	1908	St. Roch	français	épouse		
	2			Pascale	Jeanne	1911	St. Roch	français	épouse		
	3			Pascale	Jacqueline	1911	St. Roch	français	épouse		
	4			Pascale	Charlotte	1911	St. Roch	français	épouse		
	1			Davi	Julia	1911	St. Roch	français	épouse		
	1			Blomus	Raimond	1904	St. Roch	français	chef	chauffeur	
	2			Blomus	Raymond	1907	St. Roch	français	épouse		
	3			Blomus	M. Louis	1908	St. Roch	français	épouse		
	4			Blomus	Paul	1911	St. Roch	français	épouse		
	1			Schayzac	Michel	1885	St. Roch	français	chef	bourgeois	
	2			Schayzac	Gabrielle	1892	St. Roch	français	épouse		
	1			Sasarras	Antoine	1895	St. Roch	français	chef	journalier	
	2			Sasarras	Thérèse	1900	St. Roch	français	épouse		
	3			Sasarras	Leonor	1905	St. Roch	français	épouse		
	4			Sasarras	Antonia	1904	St. Roch	français	épouse		
	5			Sasarras	Terese	1908	St. Roch	français	épouse		
	6			Sasarras	René	1865	St. Roch	français	épouse		
	1			Falier	Alain	1908	St. Roch	français	épouse		
	2			Falier	Martha	1907	St. Roch	français	épouse		
3			Falier	Jeanne	1904	St. Roch	français	épouse			
4			Schuch	Vincent	1895	St. Roch	français	chef	employé		
5			Schuch	Germaine	1902	St. Roch	français	épouse			
6			Schuch	Louis	1903	St. Roch	français	épouse			
7			Schuch	Marius	1904	St. Roch	français	épouse			
8			Schuch	Lucienne	1906	St. Roch	français	épouse			
9			Colonna	Yvonne	1906	St. Roch	français	épouse			
10			Colonna	Victoire	1907	St. Roch	français	épouse			
11			Colonna	Marcelle	1907	St. Roch	français	épouse			
12			Colonna	Régis	1908	St. Roch	français	épouse			

住所はカモワンに実在する通りの名前（サン・ロシュ通り）が明記されている。  
 出典：A. M. 2 F 347.

図表3 1931年の国勢調査原簿（マルセイユ、カルティエ・カモワン）

DESIGNATION des QUARTIERS, villages ou hameaux	NUMÉROS du QUARTIER, VILLAGE, hameau ou feu			NOMS DE FAMILLE	PRÉNOMS	ANNÉE de NAISSANCE	LIEU de NAISSANCE	NATIONALITÉ	SITUATION par RAPPORT au chef de ménage	PROFESSION	Pour les militaires, chefs d'entreprise, avocats & médecins, instituteurs & pasteurs, etc. Pour les employés et ouvriers, indiquer le nom de patron ou de l'entreprise qui les emploie.
	des maisons	des ménages	des individus								
des Camonis village	1	21		Berret	Jean	1920	St. Roch	français	épouse		
	1			Berret	Louis	1919	St. Roch	français	chef	flaouri	
	1			Berret	Kiki	1922	St. Roch	français	épouse		
	1			Berret	Charlotte	1922	St. Roch	français	épouse		
	1			Berret	Louis	1923	St. Roch	français	épouse		
	1			Berret	Lucie	1924	St. Roch	français	épouse		
	1			Zicconi	August	1925	St. Roch	français	chef	employé	
	1			Zicconi	Marie	1927	St. Roch	français	épouse		
	1			Zicconi	Maria	1928	St. Roch	français	épouse	employé	
	1			Zicconi	Paul	1928	St. Roch	français	épouse		
	1			Cabanis	Antoine	1927	St. Roch	français	chef	employé	
	1			Cabanis	Lucienne	1927	St. Roch	français	épouse		
	1			Cabanis	Jean	1928	St. Roch	français	épouse		
	1			Cabanis	Jean	1928	St. Roch	français	épouse		
	1			Cabanis	Emmanuel	1929	St. Roch	français	épouse		
	1			Yata	Louis	1928	St. Roch	français	chef	ouvrier	
	1			Yata	Maria	1929	St. Roch	français	épouse		
	1			Yata	Louis	1929	St. Roch	français	épouse		
	1			Yata	Raoul	1929	St. Roch	français	épouse		
	1			Brunetti	Joseph	1929	St. Roch	français	chef	journalier	
1			Brunetti	Lucienne	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Jean	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Victor	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Lucie	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Louis	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Maria	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Alfred	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Emmanuel	1929	St. Roch	français	épouse			
1			Brunetti	Maria	1929	St. Roch	français	épouse			

5人核家族と4人核家族が交互に続く。住所は「カモワン村」と曖昧に表記されている。  
 出典：A. M. 2 F 347.

ら、マルセイユ全体の一般世帯の数値からもわかるように、マルセイユにおいては人口の水増しは4人・5人世帯のみに関わる問題ではない。1936年の国勢調査の原簿を分析したテュフリも、主に14歳以下の子供と25歳から45歳までの既婚者から構成される家族が捏造の対象になっていたと結論付けているが、とくに4人・5人世帯が多数を占めていたとは指摘していない<sup>(23)</sup>。

このようにマルセイユの原簿では、人口の水増しがリヨンの「5人核家族の法則」のように明白な形で表れていないために、捏造された期間のマルセイユ人口の推定値を算出したり、人口を確定したりするのは、はるかに困難な作業なのである。それでは、マルセイユの人口捏造方法を見つけ出すには、いかなる史料批判の方法が有効であろうか。本稿では、1931年の国勢調査の原簿と対照し得る他の史料を活用して、実在した被調査者を原簿で確認しながら捏造方法を明らかにしていきたい。

最初に、参照した史料を信憑性の度合いに応じて大きく2つに分けることにする。第一に、信憑性がかなり高い史料として、マルセイユ出身者の男性に関する出生届<sup>(24)</sup>、1920～30年代のマルセイユ市公報に載せられた戸籍に関する情報<sup>(25)</sup>、1946年の国勢調査の原簿<sup>(26)</sup>、東部郊外に立地するコデール工場の従業員名簿<sup>(27)</sup>が挙げられる。第二に、上記のものに比べて信憑性にいくらか欠ける史料としては、職業年鑑<sup>(28)</sup>、1931年の選挙人名簿<sup>(29)</sup>、1946年以外の国勢調査の原簿<sup>(30)</sup>などがある。1931年の国勢調査の原簿とこれら7種類の史料を照らし合わせた結果、同一の被調査者に重複も少なくないが、合計で402人分の情報を得ることができた。

この史料批判の方法でまず明らかになった点は、図表4と同様な職場や雇主の氏名が補足情報として記載されたページは、他の史料でもその被調査者を確認することができ、より信憑性が高いということである。例えば、コデール工場で働いていたパスカル・ルイ Pascal Louis の娘、ジャクリヌ Jacqueline は、1931年のマルセイユ市公報に出生が掲載されており、チュニジア出身のヴィルミュス・エドモン Vilmus Edmond は、コデール工場の従業員名簿に登録されていた。さらに、カモワンの隣の街区にあるビール醸造工場フェニックス Phénix の職員であったエストリュシュ・ヴァンサン Estruch Vincent の一家は、長女のルイーズ Louise を除いて、4人全員を1946年の国勢調査の原簿に見つけ出すことができたのである。

捏造が疑われる図表3のページと比較すれば、世帯規模や出生地が図表4のページではより多様なのが明白である。標本として分析したカモワンの国勢調査の原簿、57ページ(1,591人分)で、他の史料でも被調査者を確認できなかったページは18ページを数えたが、そのうち17ページには職場や雇主の氏名が補足情報としてまったく記載されていなかった。また、この17ページに登録された471人の被調査者のうち、381人(81%)はマルセイユ生まれであり、出生地の捏造が容易なマルセイユ出身者が大幅に水増しされていたのが明らかである。

こうした他の史料に依拠した史料批判の方法以外に、人口捏造部分を見つけ出す方法として、

ルイ・アンリが提唱した国勢調査の人口学的内部検証もカモワンの標本で試みてみた<sup>(31)</sup>。アンリは、14歳以下までの男の子供は成人に比べて、戦争や移住の影響をより受けにくいという考えで、とくに4歳以下の男の子供の割合を計算しながら、1901年から1936年までの各県の国勢調査を検証している。その結果、1931年はローヌ県、プーシュ＝デュ＝ローヌ県、コルシカ島、ピレネ＝ゾリアンタル県で男の子供の割合が高く、これらの県では調査の誤りが含まれ不正確な統計情報になっているとしている。

1931年のカルティエ・カモワンの標本でも、アンリの検証と同様に、男の子供の割合が高いことが明らかになった。まず、世帯員の続柄に息子と記載されたグループの割合が、1911年の20%から1931年には24%まで大きくなっていった。さらに、年齢構造を分析してみても、0-4歳階級の女の子供は、1911年の55人(22%)から1931年には187人(24%)と増加していたのに対して、0-4歳階級の男の子供は同期間に、56人(24%)から254人(31%)に急増していたのである。

1936年のリヨンの標本でも、男の子供の割合が優勢であったことなどから、特定の調査区や街区、通りを分析する際に、男の子供の割合は人口の水増しを判断する一つの目安となるのは確かである。

## おわりに

以上のように、本稿では捏造が疑われる期間のリヨンとマルセイユにおける人口推移をまず検討し、次に人口捏造方法を紹介してきた。ここでは本稿の結論として、人口統計の正確性を損なっている、捏造された期間の両市の国勢調査原簿を史料として利用する際に、いかに史料批判を行っていくべきかについて三点に分けて整理し、今後の課題を展望しておきたい。

第一に、リヨンの1911年から1936年までの国勢調査原簿を利用する際には、異常に割合の高い5人核家族を取り除かなければならない。1931年のマルセイユの原簿でも、捏造の疑いが明らかなページでは4人か5人核家族が集中して記載されていた。けれども、マルセイユでは、1936年の原簿を分析したテュフリが指摘するように、主に14歳以下の子供と25歳から45歳までの既婚者から構成されるあらゆる世帯が捏造の対象になっていたと考えられる。

第二に、リヨンではリヨン出身者が、マルセイユではマルセイユ出身者がこうした核家族の大部分を構成していたことから、リヨン出身者やマルセイユ出身者がひとかたまりに連続して登録されたページは、水増しの疑いがかなり高いと言えよう。また、リヨンでは捏造が疑われる5人核家族は、すべてフランス国籍と申告されていた。それに対して、リヨンよりも外国人の割合が高く、外国人の存在がより身近であったマルセイユにおいては、外国人、とくにイタリア人も捏造の対象になっていたようである<sup>(32)</sup>。

第三に、マルセイユの原簿では、職場や雇主の氏名が補足情報として記載されたページはよ

り信憑性が高いのが判明した。リヨンの原簿とは異なり、必ずしも職場は住居のすぐ近くにあるとは限らず、同じ建物内に同じ雇主や職場の人間が何人も集中することはなかった。ただし、この補足情報は記載されない場合もあるので、他の史料を原簿と対照して、実在した被調査者を確認していく史料批判の方法も試みる必要があるであろう。さらに、アンリが考案した男の子供の割合計算に基づく人口学的内部検証は、特定の調査区や街区、通りを分析する際に、捏造の度合いを推測するのに有効であると思われる。

本稿では、人口が捏造された期間のリヨンとマルセイユの人口を確定することは目的としてはいなかったが、これまでの考察により、両市の国勢調査原簿を史料として利用する際に、人口の捏造箇所を見分ける大きな基準は設定できたであろう。本稿においては、国勢調査原簿の不正確な部分をもっぱら強調してきた。しかしながら、国勢調査の原簿は、一市町村の住民全体を一度に把握できる貴重な史料であることには変わりはない。上記に述べたような史料批判を実行しながら、少しでも国勢調査がもつ人口統計の正確性を取り戻していかなければならないだろう。

最後に、マルセイユとリヨンの人口捏造問題は、両都市間のフランス第二都市をめぐる争いが発端であると一般的には言われるが、この問題についても若干の検討を加えておきたい。チュフリヤロンカヨロは、こうした第二都市をめぐる争いの他に、議員の人数や様々な税率が総人口によって決められていたことも、人口の水増しの原因として挙げている<sup>(33)</sup>。また、図表1の両大戦間期のフランス総人口の推移を再び見るならば、人口の水増しは、果たして市町村レベルの問題であったのかとの疑問も浮かぶ。第一次大戦以降に激しさを増していった人口増加の促進を求める国家全体の風潮が、マルセイユとリヨンの人口捏造問題にも影響を与えていなかったであろうか。この点については、マルセイユとリヨン以外の都市の人口推移も検証しながら、改めて考察し直す必要があるであろう<sup>(34)</sup>。

#### 註

- (1) J. Dupâquier (dir.), *Histoire de la population française, t. 3, de 1789 à 1914*, Paris, 1988, pp. 43-49; P. Guillaume et J. -P. Poussou, *Démographie historique*, Paris, 1970, pp. 309-310.
- (2) I. N. S. E. E., *Premiers résultats du recensement général de la population. Effectué le 10 mars 1946*, Paris, 1947, pp. 22, 33, 45; *Idem.*, *Annuaire statistique de la France 1966. Résumé rétrospectif*, 72<sup>e</sup> volume, nouvelle série, n° 14, Paris, 1966, pp. 22-23, 32, 41-42.
- (3) J. Bienfait, "La population de Lyon à travers un quart de siècle de recensements douteux (1911-1936), Premier article: Les données du problème", *Revue de géographie de Lyon*, t. 43, n° 1, 1968, pp. 63-94; *Idem.* "La population de Lyon à travers un quart de siècle de recensements douteux (1911-1936), Deuxième article: Examen critique des listes nominatives", *Revue de géographie de Lyon*, t. 43, n° 2, 1968, pp. 95-132.
- (4) P. Guillaume et J. -P. Poussou, *op. cit.*, p. 309.
- (5) C. James Haug, "Manuscript Census Materials in France: The Use and Availability of the *Listes Nominatives*", *French Historical Studies*, t. 11, n° 2, 1979, pp. 266-269.

- (6) *Ibid.*, *op. cit.*, pp. 262-265; J. Dupâquier (dir.), *op. cit.*, pp. 38-45.
- (7) J. Bienfait, "Premier article", pp. 68-69; J. Dupâquier (dir.), *Histoire de la population française, t. 4, de 1914 à nos jours*, Paris, 1988, p. 34.
- (8) J. Dupâquier (dir.), *Histoire de la population française, t. 3, de 1789 à 1914*, p. 49; *Idem. Histoire de la population française, t.4, de 1914 à nos jours*, p. 35.
- (9) J. Bienfait, "Premier article", pp. 79-80; J.-L. Pinol (dir.), *Atlas historique des villes de France*, Barcelona, 1996, pp. 158-159.
- (10) J. Bienfait, "Premier article", p. 68.
- (11) J. Bienfait, "Deuxième article", p.132.
- (12) J. Dupâquier (dir.), *Histoire de la population française, t.4, de 1914 à nos jours*, p. 35; J. Bienfait, "Premier article", p. 69.
- (13) J. Coppolani, *Toulouse, étude de géographie urbaine*, Toulouse, 1954, pp. 280-283.
- (14) J. Bienfait, "Deuxième article", pp. 96-132.
- (15) 「職員 employé」という用語は公務員、公企業か公的な性格を持つ企業の職員、民間企業の職員などに対して主に使われるが、ときとして店員や使用人、管理人なども含まれる場合があった。O. Marchand et C. Thélot, *Deux siècles de travail en France*, Paris, 1991, pp. 108-109.
- (16) M.-F. Attard-Maraninchi et E. Temime, *Migrance: Histoire des migrations à Marseille, t. 3: Le cosmopolitisme de l'entre-deux-guerres (1919-1945)*, Aix-en-Provence, 1990, pp. 23-29.
- (17) M. Roncayolo, *Les grammaires d'une ville: Essai sur la genèse des structures urbaines à Marseille*, Paris, 1996, pp. 98-108.
- (18) マルセル・ロンカヨロ氏に2006年3月28日に直接お話をうかがった際の見解である。
- (19) C. Tuffelli, "La population de Marseille: Évolution de 1936 à 1946", *Économie et Humanisme*, n° 2-3, 1951, pp. 25-29.
- (20) O. Lambert, *Marseille entre tradition et modernité: Les espérances déçues (1919-1939)*, Marseille, 1995, pp. 116-117.
- (21) カモワンの原簿は、A. M. 2 F 347; A. D. 6 M 508, マルセイユ全体に関する調査報告は、A. M. 1 F 4: Notes sur le mouvement de la population, Mémoire de M. Richard, directeur de l'Urbanisme.
- (22) なお、中心街の街区や、他の郊外の街区についても現在、人口の捏造問題を調査中である。
- (23) C. Tuffelli, *op. cit.*, pp. 27-28.
- (24) 結婚後も名字の変わらない男性のみを参照した。出生届は県史料館と市史料館に所蔵されているが、100年経過の閲覧制限がある。
- (25) 3年分を参照した。A. M. 1 C 32-34: *Bulletin Municipal Officiel de la ville de Marseille*, 1929-1931.
- (26) 戦争の影響も残るが、INSEEによる最初の調査で信用性は高い。J. Dupâquier (dir.), *Histoire de la population française, t. 4, de 1914 à nos jours*, pp. 18-19, 36-37. カモワンの原簿は、A. M. 2 F 408.
- (27) A. D. 122 J 1: Répertoire du personnel étranger 1924-1930 et 1930-1936; 122 J 2: Répertoire du personnel 1921-1922.
- (28) *Indicateur Marseillais*, 1932. 職業年鑑の情報は必ずしも毎年更新されていない。
- (29) A. M. 1 K 716-727: Listes des électeurs de 1931, suivies des listes d'addition et de radiation de 1931 et 1932. コルシカの選挙人名簿と同様に、マルセイユの選挙人名簿も捏造の対象になっていると言われる。M. Roncayolo, *op. cit.*, p. 104.
- (30) 1872年 A. D. 6 M 194; 1891年 A. D. 6 M 308; 1901年 A. D. 6 M 375; 1906年 A. D. 6 M 412; 1911年 A. D. 6 M 451; 1921年 A. M. 2 F 296; 1926年 A. M. 2 F 312; 1936年 A. M. 2 F 390.

- (31) L. Henry, "Le contrôle des recensements", *Population*, t. 4, n° 2, 1949, pp. 231-248.
- (32) M. -F. Attard-Maraninchi et E. Temime, *op. cit.*, pp. 26-29.
- (33) C. Tuffelli, *op. cit.*, pp. 28-29; M. Roncayolo, *op. cit.*, p. 98.
- (34) 両大戦間期の人口増加推進をめぐる議論については、さしあたり F. Thébaud, "Le mouvement nataliste dans la France de l'entre-deux-guerres: l'Alliance nationale pour l'accroissement de la population française", *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, t. 32, 1985, pp. 276-301 を参照。

Fabrications in Manuscript Census Registers  
of the French Population:  
The Cases of Lyon and Marseille

KOKUBU Hisao

*The Institut National de la Statistique et des Etudes Economiques (INSEE)*, the National Institute for Statistics and Economic Studies, conducted post-enumeration tests in the 1946 census and in the 1966 annual statistics. According to these tests, Lyon's populations from 1911 through 1936 were fabricated and significantly increased, along with those of Marseille from 1926 through 1936. As the *listes nominatives*, the manuscript census registers were carefully examined, it became clear that the fabrication of residents' numbers was conducted in units of a hundred thousand in both cities, which meant that they employed "labor-saving" processes for fabricating false bulletins.

In Lyon, the rate of nuclear family households with 5 members was abnormally high. In the case of Marseille, fabrication mainly aimed at private households with children aged 14 or under and married people aged 25 to 45. In order to more easily facilitate the fabrication of birthplace, in both Lyon and Marseille, the number of people originating from each city was greatly inflated.

These fabrication problems in both cities are generally believed to have stemmed from their competition for the position of France's second largest city of the population. It may also be attributed to specific policies to determine the number of local councilors to be allocated and various tax rates according to the total population, or to a national trend, which required higher population growth during both the 1st and 2nd World Wars.

**Keywords:** manuscript census registers, Lyon, Marseille, fabrication of the population, France's second largest city of the population